



尾張の地誌・地名を調べる

出典：『尾張名所図会 前編 巻之五』

地域別に地形・史跡（名所）・産物などの情報が記録された資料で地誌と呼ばれるものがあります。ここでは尾張の地誌などの情報をまとめた参考図書など、尾張の地誌・地名を調べるために役立つ資料をご紹介します。

1. 参考図書を調べる
2. 自治体史（誌）・学校史（誌）を調べる
3. 地名の由来や読み方を調べる

📖：図書 🌐：インターネット

1. 参考図書を調べる

📖『大日本地名辞書 第5巻 北国・東国 増補版』 吉田東伍／著 富山房 1982年 [N29103]

国郡別に地名の由来・史跡・地形などについて根拠となる資料を明示して解説しています。本書の初版は吉田東伍の個人編纂により明治28年に起稿、明治33年から明治40年にかけて分冊発行されました。これに明治42年に発行された続篇（北海道・樺太・琉球・台湾）を加えて再刻し、さらに稿本「大日本地名辞書余材」を照応して増補されたもので、地誌研究の基本的資料とされています。

📖『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県の地名』 平凡社 1981年 [N291]

古典・地誌・紀行・日記・調査報告などが丹念に引用・紹介されていて、根拠となる資料名等も明示されています。書名には「愛知県の地名」とありますが、考古遺跡・城館跡・社寺などの建造物や遺構も、広い意味の歴史地名として扱われています。項目は近隣の諸地名との関連がわかるように、地域ごと（出版当時の郡・市・区）に配列されています。また、末尾に「文献解題」・「行政区画変遷・石高・戸口一覧」・「五十音順索引」・「難読地名一覧」があります。

❗ 根拠となる近世の資料を確認したい場合

「文献解題」として尾張・三河の地誌類の系譜の解説や個々の資料の解題及び原本・写本・版本の所在、活字本・複製本の情報がまとめられています。

! 「行政区画変遷・石高・戸口一覧」の内容

出典等	成立年等	内容
尾張国郷帳	正保 3 年 (1646)	町村名、石高
天保郷帳	天保 5 年 (1834)	町村名、石高
尾張徇行記	文政 5 年 (1822)	戸数、人口
大区小区	明治 5 年 (1872)	大区小区の番号
地方行政便覧	明治 19 年 (1886)	郡区、町村名
市町村制施行による町村名	明治 22 年 (1889)	郡市、町村名
町村合併促進法交付時の町名	昭和 28 年 (1953)	市町村名
現在	昭和 56 年 (1981)	市区町村名、町名ないし字名

📖 『角川日本地名大辞典 23 愛知県』 角川書店 1989 年 [N291]

「総説」・「地名編」・「地誌編」・「資料編」の 4 部門で構成されています。「地名編」は五十音順に配列して、地名ごとに中世・近世・近代に分けて解説されています。「地誌編」には市区町村ごとの現況・立地・沿革の解説に加えて、現行行政地名（名古屋市であれば町）ごとの世帯数・人口と簡略な解説があります。「資料編」には国郡沿革表・藩県沿革表・愛知県年中行事・参考地図（分布図・交通図など）・愛知県参考図書目録があります。

また、別巻の📖 『角川日本地名大辞典 別巻 1 日本地名資料集成』は都道府県別 47 巻の手引書・解説書・資料集となっており、各種の一覧表や地名主要資料解説、近世地誌目録などがあります。

📖 『なごやの町名』 名古屋市計画局 / [編] 名古屋市計画局 1992 年 [NA295]

名古屋の“町名の変遷をたどり、失われた町名を記録し、村や町の起こり、名称の由来などを史実に基づいて明らかにし、資料としてまとめ発刊”されたもので、名古屋市域の地理および原始から近現代までの歴史をまとめた「第一章 総論」と「第二章 各区の概要・町名解説」、「第三章 資料編」からなります。

! 「第三章 資料編」の内容

標題	内容
市町村合併変遷表	区別に明治初年～昭和 30 年までの合併の変遷がまとめられています。
区別町名変遷表	区別に江戸期～平成 3 年 3 月現在までの町名・大字名の変遷がまとめられています。
市域拡張の変遷図	明治 22 年の市制施行以降の市域の拡張を一つの図にまとめたものと、港区部分の詳細図があります。
行政区変遷図	明治 41 年の 4 区制～昭和 50 年の 16 区制までの行政区の変遷図があります。
字名一覧	『明治十五年愛知県郡町村字名調』所収の字地のうち現在の名古屋市域に限って書き出したもので、読み方もわかります。

清須越の地名	清須越の町名一覧があり、名古屋移転の時期と近世・近現代の町名の変遷がわかります。
町名索引	「第二章 各区の概要と町名解説」の中で、町名解説の項目として立項されているものを五十音順に掲出しています。

*この他、「住居表示実施区域図」・「住居表示関係法令」・「参考文献一覧」などがあります。

! 現在の地名（町名）から昔の地名を調べる

名古屋については、📖『なごやの町名』所収の「区別町名変遷表」により平成3年3月の町名・大字名から江戸期までの町村名をたどることができます。尾張については、📖『日本歴史地名大系 第23巻 愛知県の地名』所収の「行政区画変遷・石高・戸口一覧」で昭和56年の町名から江戸時代初期の町村名がわかります。

! 地図から昔の地名を調べる

📖『なごやの町名』所収の「第二章 各区の概要と町名解説」の各区の初めに該当区の「現町名図（平成3年3月現在）」と「旧町村名図（明治17年頃）」があり、地図上で町村名が確認できます。昭和30年代以降の町名変更であれば住宅地図で確認することができますが、それ以前については一枚ものの地図などを調べてみます。

! 産物から調べる

- 📖『江戸時代人づくり風土記 23 ふるさとの人と知恵愛知』 農山漁村文化協会 1995年 [2105]
資料編の中に「寛文村々覚書」・「尾張徇行記」・「三河名所図絵」により作成された「江戸時代愛知の物産一覧」があり、郡別に各産物の産地の旧町村名・現地名がわかります。
- 📖「御国産吟味之留」（『名古屋叢書 第11巻』 愛知県郷土資料刊行会 1983年 [NA08] 所収）
尾張、美濃、信濃（木曾谷）の特産物が郡別に挙げられ、その産地の村名も書かれています。
- 📖「尾陽産物志」（『名古屋叢書 第11巻』 愛知県郷土資料刊行会 1983年 [NA08] 所収）
元文2年（1737）頃に成立したもので、当時の尾張の産物が郡別に挙げられています。産地の村名はわかりませんが、その郡で生息・栽培している産物（動植物）が非常に詳しく、例えば「とんぼ」であれば「赤とんぼ、やんま、めつと、青とんぼ…」など詳しくわかります。

2. 自治体史（誌）・学校史（誌）を調べる

自治体史（誌）や小学校の学校史（誌）などには地域の歴史がわかりやすくまとめられていることが多く、その地域の地誌や地名を調べる上で役立ちます。

- 📖『名古屋市史 [第8] 地理編』 名古屋市／編 愛知県郷土資料刊行会 1980年 [NA25]
大正5年刊の復刻版で、町名の由来のほか、名蹟、名所、名木・花、川・池・湾、橋梁について書かれており、出典についても明示されています。
- 📖「愛知郡村誌」（『新修名古屋市史 資料編近代1』 名古屋市 2006年 [A25] 所収）
明治10年前後の愛知郡各村の地誌のうち、名古屋市域のものが活字翻刻されています。項目は村によって若干の違いがありますが「押切村誌」を例にとると、「枝村、村内市坊、疆域、幅員、沿革、里程、

地勢、地味、税地、貢租、戸数、人数、牛馬、舟車、川、橋、溝、道路、掲示場、社、寺、学校、村会所、警察屯所、電線、物産、民業」についての簡略な説明があります。

📖『〇〇区の歴史（名古屋区史シリーズ）』 愛知県郷土資料刊行会 1981年-2009年 [A25]
名古屋市の各区の歴史をまとめたシリーズで、区により構成が異なりますがコンパクトでわかりやすいです。現在は首巻（名古屋の文化史）と中区を除く15区のものが発行されています。

📖『名古屋の史跡と文化財 新訂版 第3版』 名古屋市教育委員会 1998年 [A295]
名古屋の史跡や文化財の所在地を確認することができます。項目別目次・行政区別目次・(五十音)索引・指定文化財目録があります。

3. 地名の由来や読み方を調べる

尾張の地名の由来や読み方については前述の「1. 参考図書調べる」でご紹介した資料により調べることができますが、ここではその他で地名の由来や読み方を調べる際に役立つ資料をご紹介します。

3-1. 地名の由来を調べる

📖『名古屋の地名 増補再版』 水谷盛光／著 中日新聞社 1982年 [NA295]
“『名古屋市史 地理編』・『尾張国地名考』から、定説に近いと認められるものに限って摘出し、類書によって補足した”ものです。

📖『[名古屋市] 町名由来記 上下』 毎日新聞社 1952-1953年 [NA295]
毎日新聞に連載された「町名由来記」の切抜クリッピングです。

📖『名古屋地名年表 町名の歴史』 服部鉦太郎／編著 日光堂書店 1956年 [NA295]
名古屋の地名町名の由来を年表体に編述したもので、町名索引もあります。

3-2. 地名の読み方を調べる

“現代に伝わる地名の文字発音は、命名当時のままということは少なく、漢字をあて、あるいは別の漢字にとりかえ、その文字に従って、よみ・発音が変わる、という変遷を経ている”（『角川日本地名大辞典 別巻1 日本地名資料集成』p.805）と考えられるため、その読み方を調べることは容易ではありません。近代以降の特定の時点での読み方がわかる資料もありますが、そのほとんどは町村名・大字名のもので③「**明治十五年愛知県郡町村字名調**」のように小字名の読み方を記録したものは他には見当たりません。ただし、これらに記録された地名の読み方が地元の方の呼び方と異なることもあるようです。

①尾三両国村名取調簿（明治7年5月頃）

📖『新修名古屋市史 資料編近代1』 名古屋市 2006年 [A25]
「30 尾三両国村名取調簿（抄）愛知県」により当時の名古屋・熱田市街にあった町とそのフリガナがわかります。

②郡区町村一覧（明治14年3月）

📖『明治大正日本国勢沿革資料総覧 第2巻』 柏書房 1983年 [N3181]

③明治十五年愛知県郡町村字名調（明治 15 年）

📖『愛知県地名集覧』 日本地名学研究所／編 日本地名学研究所 1969年 [NA29]

昭和7年に愛知県教育会より刊行された「明治十五年愛知県郡町村字名調」を復刊したもので、小字名とそのフリガナもあります。郡別に編集されていますが、五十音から引ける索引も同時に刊行されています。

📖『なごやの町名』 名古屋市計画局／[編] 名古屋市計画局 1992年 [NA295]

前述のとおり現在の名古屋市域に限って書き出したものがあります。

④愛知県郡市区町村大字名録（大正 13 年 2 月）

📖『愛知県郡市区町村大字名録』 愛知県 1924年 [S0A2]

⑤名古屋市町村名及字名簿（昭和 2 年 1 月）

📖『名古屋市町村名及字名簿』 名古屋市調査課／編 名古屋市調査課 1927年 [S0A2]

区別に町名と字名がイロハ順に編集され、一部のもののみですがフリガナがあります。

⑥帝国行政区画便覧（昭和 16 年 2 月 1 日現行）

📖『帝国行政区画便覧 改訂 19 版』 警眼社 [#481]

加除式の資料ですが最後の加除が昭和16年2月1日現行となっており、当時の名古屋市の町名とそのフリガナがわかります。

⑦全国市町村字名大鑑（昭和 26 年）

📖『全国市町村字名大鑑』 日地出版 1951年 [S291]

⑧現在

🌐 名古屋市公式ウェブサイト (<https://www.city.nagoya.jp>)

「トップページ>くらし・手続き>住まい・上下水道>町名・町界変更、住居表示の実施>名古屋の町名一覧」に区別の五十音順町名、よみかた、英文、管轄、住居表示実施の表示があります。

🌐 日本郵便 (<https://www.post.japanpost.jp/index.html>)

『全国地名駅名よみかた辞典』など、地名の読み方の典拠・参考資料として日本郵便の情報も使われることがあります。郵便番号検索では住所からも検索することができます。

作成：名古屋市図書館（2025年12月改訂）